

平成31年度の活動記録(4月)



参加者数
対象者：21名
協力員：13名

第1回(4月8日) ◎皆勤者のお祝い

7人もの「生き生きさん」が皆勤賞を受賞しました

- 平成31年度最初の「生き生き」は前年度皆勤者の表彰からスタートです。
- 皆勤賞受賞者のお写真は①面に掲載させていただきました。おめでとうございます!!
- 表彰式のあとは紅白旗揚げゲームや輪投げゲームをみんなで楽しみました。



皆勤賞おめでとうございます



構えがいいねっ!



「おこやかエブリデイ」はいつも元気イッパイ!

◎本日のおやつ



パンとソーセージ



ハイ!赤あげて.....



輪投げ優勝の吉田さんのショット

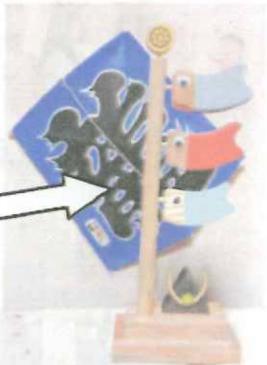
第2回(4月22日) ◎こいのぼり作成

参加者数
対象者：23名
協力員：15名

◎今月からお友達

♪大きな真鯉はお父さん～

- 今日は本年度初の作品作りです。
- 近づく端午の節句にちなんで卓上サイズの鯉のぼりを作りました。
- ワイワイ・ガヤガヤ・あーでもない・こーでもないとか言いながらも全員「完成」!よかったよかった。



今日も「おこやかエブリデイ」でウオームアップ



ハイ・ここをこうしてエ.....

◎本日のおやつ



ポテトサラダとピール



そうそうそこへ.....



なかなか難しいですね



●俳句の季語

青あらし（青嵐）は、青葉の頃に吹き渡るやや強い南風のことで、初夏の季語となります。

季節のことは、つまり季語は、昔の人々の生活の中から生まれ育まれてきたものが多くあります。ですから、風といっても、単なる物理現象だけを指しているのではなく、それにまつわる人々の微細な生活感情を豊かに含んでいます。

●“風薫る五月”

今日では決り文句化していますが、この「風薫る」は、もとは漢語の「薫風」で、訓読みして和語化したものです。5月の花の香りを運んでくる風は、青葉若葉を吹きわたる爽やかな初夏の風の意味になり、はっきりした季節感をもって用いられるようになりました。「風かほる羽織は襟もつくろはず」（芭蕉）「薫風や恨みなき身の夏ごろも」（蕪村）などという句もあり、薫風を明らかに夏の季語として使っております。

●薫風<青嵐 鬨りのない明るい風

風が「薫る」程度の風速から、もう少し強くなると「青嵐」になります。セイランと音読すると「晴嵐」と混同してしまうので、俳句ではアオアラシと訓読することが多いようです。「青嵐定まる時や苗の色」（服部嵐雪）と使われるように、その爽快感や吹く烈しさに着目されて、さまざまに詠まれております。「風青し」「夏嵐」もほぼ同じ意味であります。

夏嵐机上の白紙飛び尽す 正岡子規



あなたにとっての「平成」とは？

マイ・平成史を作ってみよう

布施 清一



いよいよ新しい元号での新しい時代がスタートしましたね。「令和」ってどうですか？もう慣れましたか？「平成」の時もそうでしたが、本当に新しい元号に慣れるまではかなり時間がかかると思いますね。自分もたしか1年位は何か違和感があったような覚えがあります。（私だけかも・・・）

生前退位が論議され始めてから早数年？ですが、長かったような短かったような時間でした。今回は昭和と違って崩御（天皇がお隠れになる、亡くなること）ではなく、5月1日に元号が変わることが事前にわかっている上に、4月1日に安倍首相から発表もあったわけですから、昭和から平成に変わった時と比較したら混乱は少ないでしょう。

それはともかく、元号が変わる瞬間に立ち会えるのは正に日本の歴史の生き証人になるということなので、とてもラッキーだと思います。また、大変不敬な言い方になってしまいますが、次の機会に立ち会えるかどうかは誰にもわかりません。

自分は「昭和」生まれで「平成」を生き抜き次の「令和」を迎えました。既に3元号を経験しています。

改元は滅多に無い日本の歴史上の大イベントなのです。ですので、これを機会に皆さんも自分なりに平成の時代とは何だったのか、何があったかを、じっくりと考え、思い出をまとめて「自分の平成史」を編さんして見てはいかがでしょうか。たとえば・

①平成時代の大きな出来事②平成時代の食べるもの・食糧の変化③平成時代の住まいや建物の変化④平成時代の着る物の変化等々ご自身の興味関心のある分野だけでも良いですから、新聞・雑誌・TV・ラジオ特集をよく読み、よく見、耳を澄ませて、情報収集なさることをおすすめいたします。メモやスクラップブックの作成も有効です。

そうすれば「令和」生まれの世代にお前の生まれる前はああった・こうだったと、教えてあげられることもできますよね。





相良でんぞら史話 十一

大澤寺十五代住職 今井一光

《 蕉園渉筆 その七 》

蕉園渉筆本文 ⑤

内田村から出た笥

得古樋版

原文

内田邑、有古塘、陰樋陥而不能引水、邑人不詳其始、里正搜旧簿、永禄年所作、爾後意補理、距今近三百年在、四片及蓋版皆朽、但底版有水痕、稍凹而不腐、余得而収之、古色蒼然、蓋石楠木樹、可以為文具也、不欲其割失古色以故未果



小島蕉園

得古樋版（古い樋の板が手に入った）読み下し

内田邑に、古塘有り、陰樋は陥て水を引くを能わず、【塘—堤つつみ 陰樋—笥(懸樋~かけひ)】邑人は其始を詳かにせず、里正は旧簿を捜す、【里正—村長】永禄年、作りし所なり、爾後補理無し、今を距つに三百年近く在り、四片及び蓋版は皆朽す、但し底版は水痕有り、稍凹んで腐らず、【稍—やや 凹而—へこみて】余は得て之を収む、古色蒼然たり、蓋し石楠木樹、【蓋(けだし)石楠木樹—しゃくなげだと思ふ】以て文具となすべし也、其を割して古色を失うを欲せず 【割—けずる】故を以て未だ果さず 【以故—「ゆゑをもって」…「だから」】

現在の菊川市内田村のことが記されています。

蕉園は大澤寺九代住職の祐巖と親しくしていましたがおそらくこの情報は祐巖からのものと推測します。また「塘」の存在からも推定特定できます。

その内田の地(段平尾)は大澤寺前身の本楽寺があった場所その近くには内田屋敷(国指定史跡高田屋敷)があります。

記述から場所を特定するには至りませんがその辺りで出土したであろう「陰樋」について蕉園はそれを気に入り文具を仕立てようと入手します。

しかしそれを細工してカタチを変えることはその古き良き雰囲気壊してしまうことになりそうで「未だできていない」とのことです。

前回の「切株」といい古い時代の発掘品にその趣向の目を向けたことがわかります。



「堤に笥」とはこんなイメージでしょうか？(布施)⇒



石楠花の花

これからの いきいき予定

5月20日：包括支援センターのお話

6月 3日：交通安全教室

6月17日：相良保育園児との交流会



皆様のご意見や思い出話を
お待ちしております

相・福 いきいきだより

笑顔がいいわっ!!

2019年5月13日号

(通算第62号)

発行

相良・福岡 生き生きクラブ